

一貫した理念と、多様な授業

川崎晶子

現代語・現代文化学系助教授

はじめに

1年生対象の英語の授業の初日には、「英単語や文法はかなり頭の中に詰め込まれていると思うので、それを活性化させ、自分の道具として使える様に手助けするのが私の授業である」と言っている。そして、自分からの発信を大切に、つまり、リスニングであれば聞いて要旨をまとめるというような受動的整理型の勉強だけではなく、聞いて感じ（感動する、同情する、頭にくる、等々）聞いて考える（疑問を持つ、反論する、次の展開を考える、納得する、等々）ように意識的にでも努力することを勧めている。

英語の授業には上記のようなスタンスでとりくんでいるが、外国語センターに関係しているおかげで大学全体の英語教育のことを考える機会が多い。現場の視点で、筑波の英語教育を見直してみた。

筑波の英語教育システム

1年生はプレイスメントテストで、学類ごとにA、B、Cにレベル分けられる。同じBクラスでも、学類によって平均点がかなり異なるが、クラス内では学生の質がある程度似かよった「学類別能力別クラス編成」である。プレイスメントテストは手間がかかるので実施を見送っている大学が多いと聞くが、さまざまな英語力の学生をかかえた筑波大では能力別クラスは必須である。

学生は固定時間割に従って週3日、リーディング、コミュニケーション、リスニング（あるいはライティング）の3種類の授業を受ける。プレイスメントテストの成績優秀者は上級クラスを受講することもできる。一方、担当者の方は、月曜から金曜までに散らばっている170コマ近い授業を非常勤を含め55人程度で担当している。曜時限と授業の種類の希望を出して、あとは外国語センターのス

スケジュール作成係がジグソーパズルの様に時間割を作って担当が決まる。

各クラスでは、担当者が全責任を負い授業をおこない成績をつける。それに加えて、学生は学年末の検定試験に受からなければならない。検定試験は私の主観では一般入試で入ってきた学生が1年間週3回の授業でまじめに勉強すれば十分に合格できるようなレベルである。検定試験問題は統計的に検討されたものだけが使われ、成績もテスト理論に基づいて、年度によって難易度が変わらない方法で処理されている。

多様で柔軟な運用

1年生用の英語教育はかなり整ったシステムの中で実施されていると思うが、大小さまざまな問題を抱えている。

学生の英語の能力差は想像以上に大きい。中学で習う英文法がやさしいグループがある。そのレベルでは、まず週3回とも中学・高校英語のおさらいにあて、基礎学力を付ける必要がある。

多様な形態のクラスの実現の方策の一つとして、単位の出し方を学期制にすることが考えられる。上記の例で考えると、集中基礎固めを週3回1、2学期やって0.5単位が6つ、残りは3学期に、リスニング、コミュニケーション、

リーディングを0.5単位ずつ、などのような編成が可能になる。これまで通り週1回通年の授業はそのままで、1-3学期連続受講で0.5単位x3と実施すればよく混乱は生じない。この学期単位制は英語ができる学生向けのディベート、小論文の書き方など、目的がはっきりした英語の授業の開設にも便利であろう。

英語ができるといわれている学生にも、さまざまなケースがある。よくある例として、会話は完璧、母語話者と変わらない感じだが、文を書くとき*You better hurry. (You'd better hurry. 耳で聞くとhadの部分はあまり聞こえない) となってしまうようなタイプ。こういう学生は英語が好きで自信がある場合が多く、それを大事にしながらか教養ある英語やフォーマルな英語を目指すように励ます。すでにしっかりとした英語力の持ち主もいる。そういう学生にはより高度の、大学生に求められる深い思索を必要とするリーディング、レポートの書き方、発表の仕方、等の授業を提供したい。これは「できる学生には授業免除を」という発想とは逆行しているように見えるかもしれない。授業は受けたくない、授業以外のところで自分の伸ばし方でやっていきたい、という学生にはその道「授業免除」を作ることに反対はしないが、できると

いわれる学生をより伸ばすことができるような授業の提供が理想と思う。

やる気にも、かなり差がある。大きな声で「ハイ、授業ははじめますよー。教科書を出して、ちゃんと机の上に出してくださいーい。ハイ、じゃ、15頁開けくださいーい。」と、小学校の先生並に指示をださないと何も始まらないクラスがあった。勉強したくない、勉強してもどうせできない、という雰囲気がいっぱいあった。最近では、大声作戦よりは目標を身近なものにしその到達チェックとフィードバックをこまめにする、なるべく個人個人に対して働きかける、等が有効とわかってきたが、それでも40人相手では体力の消耗が激しく、自分の空回りに空しさがつのる。そんな時、「勉強したい人には少人数で充実したクラスを、そうでない人にはそれなりに」とクラス編成にもう工夫できないか思う。「それなりに」は「手抜き」ではない。Cレベルが80人いたとすると、現在は能力別に40人のC1とC2クラスに分けているが、それを例えば「単位がとればよい」という60人と「一生懸命やりたい」という20人に分ける。前者では、各自が段階をおって学習できるようにプログラムされた教材を使い、授業中は担当者が机間をまわり質問に答える。後者では、顔も名前も覚えら

れるような状況で丁寧に解説し、宿題をたくさん出して叱咤激励し、とやれたらと思う。前者の教材作りにはかなり時間がかかるが、教師も学生も意味のあるエネルギー配分ができると思う。もし一生懸命クラスを希望する学生が60人いたらうれしい悲鳴。TAを動員し実質的に少人数クラスと同様の効果をあげたい。

能力、やる気とともに、何を必要としているかも学生によって異なる。現在は学生は授業・担当者を選べない。学類能力別を發展させ、近接学類グループ能力別のような大きな枠組みにし、その中でいくつかの選択ができるようにならないだろうか。例えば、人文・比文・日国学類のBレベルのリーディングを、時事英語、文化論、小説、などの選択にしたらどうか。学生たちは好きなものには努力を惜しまず、また力も発揮する。

共通理解と一貫した目的

以上、外国語センターの英語セッションでの活発な意見交換を思い出しながら私見を交えて書いてきたが、さてこれからである。英語教育は全学にかかわり、授業を受ける学生、学生を抱える学類、教える側、それぞれが意見を持っている事柄である。これまでアンケートや授業評価などで、少しはどのような感想がある

のか、何が求められているのかわかることがあったが、断片的で実際よくわからない。今、痛切に感じるのは、情報・意見の交換である。

意見交換の焦点として、まず、「大学の」英語教育の位置づけをはっきりさせたい。何を教えるのか、何が求められているのか、共通の理解と目標を持ちたい。高校や予備校、会話学校とはちがう、大学の英語とは何か。アカデミック・イングリッシュ、教養ある大人の英語、場をわきまえいたいことがきちんと伝わる英語、論理性があり説得力のある英語、等々、さまざまな考え方を討議する必要がある。その上で、「大学全体の」英語教育を考えたい。現在授業は1年は外国語センター、2年以上は学類が責任を持つ体制、入学試験はまた独自の担当者が存在する。入試でどういう学生をとり、在学中にどう育て、進学や就職に送り出すときにどういう状態であってほしいか、というような一貫した英語教育像がなくてはいけないと思う。それをもとに各部署で有機的につながった教育をおこなう。学生は連続した効果的な教育を受けるべきである。共通英語から2年以上の英語への連携がもっと必要であろう。共通英語担当者は1年生用の英語教育のノウハウを公開し、2年生以上の英語担当者や

学類は自分の分野ではこういうことを教える必要があるということを示唆する。情報の交換が、理解を生むと信じる。そして、全学の共通意識と連携への熱意がでてくれば、改革の道も開け、もっと英語に強い筑波になれると思う。

先日ちょっとした事件があった。外国人の非常勤講師が、5,6万する教材を丸善で注文し外国語センターに請求してきた。他の私立の非常勤先で教材は買ってもらえていたので、とのことだった。個人利用の物は買わないこと、共通教材でさえ十分に買えない事情を話し理解してもらったが、予算関連のことが起こるたびに、何か変だと思い続けている。外国語センターには所属する学生がおらず、学類に来るような学生当積算校費は来ない。運営費は老朽化したLL等の機材の補修にどんどん消えていき、故障が多くて支障をきたしても教室の更新はなかなか認められない。英語の教材を買う予算は、年間40万。それで、LL教室等で使う共通教材、テーブルライブラリーに置く教材を優先購入、マルチメディア教室の教材などは単価が高くて買えない。どこがやれることか知らないが、筑波の外国語教育を良くしようと思ったら、組織の構造から考えないといけないのではないかと思う。

(かわさきあきこ 社会言語学専攻)